



## 一般社団法人日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会 第15回東京大会 大会長挨拶

細田満和子（星槎大学大学院・東京大学医科学研究所）



この度、一般社団法人日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会第15回東京大会を、2026年5月30日・31日の二日間、東京大学伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにおいて開催する運びとなりました。

本学会は、脳損傷のある方を一方向的に「支えられる存在」として捉えるのではなく、当事者や医療者や支援者が互いに影響しあい、双方向に支えあい、学びあう「ケアリング・コミュニティ」を目指しています。脳損傷の当事者、家族、市民、医療・保健・福祉・行政に携わる方々、哲学者、社会学者が、同じテーブルにつき、それぞれの経験や実践を持ち寄る。その対話の場こそが、共に生きる社会を形づくる原動力であると私たちは考えています。

15回目を迎える今回の大会テーマは、「新たな世界とつながるチャレンジ～再生する日常～」です。脳損傷という出来事は、日常を大きく変容させます。しかしその後の歩みは、決して「喪失」だけではありません。新たな挑戦を重ね、多様な人々との出会い直し、もう一度日常を紡ぎなおしていく。そのプロセスの中に、社会の在り方を問い直す力が宿っています。本大会では、そうした実践や物語から、共創（コクリエーション）のヒントを見出したいと願っております。特別講演や教育講演、2つのシンポジウム、研究発表、ポスター発表など、盛りだくさんのプログラムを用意しています。

特別講演では、デンマーク脳損傷協会からスティーネ・ハーベック（Stine Pokorny Harbeck）氏をお迎えします。スティーネ氏は同協会の若者部門の責任者として活動されるとともに、コミュニティ「Unge Hjerner（若い脳）」の創設者です。デンマークでの脳損傷の皆さんの社会参加やアドボカシー活動の状況をお話ししていただきます。デンマークでの実践から学ぶことは、日本の地域社会にとっても大きな示唆となるでしょう。

また教育講演として、2026年4月より施行される高次脳機能障害者支援法に関するセッションを設けました。法制度に向けて長年ご尽力してこられた方や制度の運用に詳しい方をお迎えし、制度の意義と今後の課題を共有します。法制度はゴールではなく、実践を支える基盤です。現場の声と政策を往還させながら、より実効性のある支援のあり方を探ってまいります。

シンポジウムは、就労支援や「新しいチャレンジ」をテーマに2つほど設けました。当事者の可能性を広げる具体的方策やチャレンジの具体例を紹介していただき、シンポジストやフロアの皆様と討議したいと思います。働くこと、学ぶこと、社会参加すること——それらは単なる社会復帰ではなく、社会をともに創り直す営みとなっています。

二日間の対話が、参加者一人ひとりの実践を照らし、地域に持ち帰られ、新たな連帯へとつながっていくことを願っております。本大会が、「再生する日常」を共に構想する出発点となりますように。どうぞ実り多い時間をお過ごしください。



日時：2026年5月30日（土）・31日（日）  
会場：東京大学伊藤謝恩ホール  
参加費：資料代500円  
申込：2026年3月8日～5月15日

※詳しくは、学会ホームページ  
<https://caring-jp.com>

### —主なプログラム—

- 5月30日（土）10時～18時
- ・高次脳機能障害者支援法施行について
  - ・デンマーク脳損傷者協会活動、日本の脳損傷者活動
- 5月31日（日）9時20分～12時
- ・委員会研究報告
  - ・障害を持つ方の様々な働き方

# 高次脳機能障害者への地域の取り組み紹介

## 『ヒューマンライブラリーを主とした活動の展開』

NPO 法人 cocokara 代表理事作業療法士 繁野玖美

私たちは、地域や職場での高次脳機能障害者の孤立、孤独、スティグマなどの低減を目的に、高次脳機能障害についての対話の場「ヒューマンライブラリー COZY 対話カフェ」を開催しています。

ヒューマンライブラリーは、2000年にデンマークで始まり、「生きている図書館」と訳され、偏見を持たれやすい人、生きづらさを抱えたマイノリティの立場にある人が「本」としてその体験を語り、「読者」である聞き手との対話を通じて相互理解を深めていく催しです。唯一のルールは、図書館と同じように「本」を傷つけないことです。

私がヒューマンライブラリーを始めたきっかけは、ある高次脳機能障害の当事者から、ヒューマンライブラリーの「本」役として自分の人生活をしたという話を聞いたことからでした。興味を覚えた私は、早速、東京ヒューマンライブラリー協会の対話カフェに参加してみました。その時の「本」役は、障害のある人ではありませんでしたが、私の知らない世界の話が印象的で、もっと聞いてみたいという気持ちになりました。そして、高次脳機能障害のことを多くの人に知ってもらうために、ヒューマンライブラリーをやってみようと思うようになりました。

「COZY 対話カフェ」はこれまで7回ほど行っています。高次脳機能障害の当事者、家族、支援者など14名が「本」役として登壇しました。また、支援者20名、高次脳機能障害の当事者17名、家族8名、関係者や市民17名、計62名が「読者」役として参加してくれました。回を重ねるごとに、「読者」役のリピーターが多くなり、その中でも当事者の割合が高くなっている傾向があります。

さて、「COZY 対話カフェ」の「読者」役は、当初の目的通り、高次脳機能障害者についての認識が変わったのでしょうか？ 毎回終了後、アンケートを行っています。「読者」役の回答数は44名、そのうち、高次脳機能障害に対するイメージが変化すると答えた人は32名（72.7%）でした。

どのような点で変化したのか、代表的なコメントをいくつかご紹介します。



- 家族も当事者であること、家族も「自分の時間を忘れてはいけない」と学びました。
  - 心の中がざわついた。家族のエネルギーがどこから出てくるのかなと思った。私だったらどうするんだろう？
  - (当事者のことを) 時間軸で俯瞰できる、優れた人というイメージになりました。
  - 当事者の生の声を聞いて、ひとつの大きな課題があっても乗り越える力もっていて、それをどう見出すかは本人の気持ちと周りの支援が大切なのだと感じました。
  - たくさん人の話を聞く中で、自然と自分自身との対話になりました。
  - 障害に向き合いながら葛藤と受容の内面が見えた。変化というより解像度が上がった感じです。
  - どんな形であれ、障害を気にしてくれている OT さんがたくさんいることに気づけた。
  - 高次脳機能障害は何か一つできないというのではなく、複数のことが重なっていることを知った。その人を取り巻く環境の影響を受けることも知った。
  - みんなしっかり生きている。
- 一方、「本」役については、14名中11名（78.6%）が「またやってみたい」と答え、7名（50%）が「自分の中に変化があった」と答えました。変化について尋ねると、
- みんなが自分の話をよく聞いてくれたことで気持ちが落ち着き、嬉しかった。
  - 家族の本音を聞いてよかった。家族が悩んでいることがわかった。
  - 当時は気づかなかった支援者の悩みも聞いて良かった。

などのコメントがありました。また、「発症から14年目にして初めて自分たちのことを語った」、「自己理解をふかめることができ、ありがたかった」というコメントもありました。

「COZY 対話カフェ」を通して、当事者や家族の生活が現実のものとして立ち上がり、当事者を支える環境への気づきや自分自身への振り返りにつながったと考えられます。そのためには、安心安全に語り合える場が必要で、主催者はそうした場を保障する努力が必要だと感じています。

## 『就労継続支援 B 型という選択肢』—言語聴覚士が紡ぐ新たな「場」—

株式会社アクセス 言語聴覚士 田中友里加

私は生活期一筋で歩んできた言語聴覚士 (ST) です。デイサービスや外来リハビリ、訪問看護を経て、2025 年 4 月、大田区に高次脳機能障害の方を中心とした就労継続支援 B 型事業所「庵 -IORI-」を立ち上げました。

### 立ち上げの経緯と原体験

私の原点は 20 年前の学生実習にあります。失語症の方々が主体的に働く B 型事業所で、言葉を越えた笑顔と活気に触れた経験が「原体験」として深く私に刻まれました。その後、臨床現場で 2 つの違和感を抱きます。一つは、働き盛りの高次脳機能障害の方が、高齢者中心のデイサービス以外に選択肢を持ちにくい現状。もう一つは、短時間の個別リハビリという「点」の関わりでは、生活の中での本当の変化や自己効力感を引き出すのに限界があるという無力感でした。

### 込められた思いと理念

転機となったのは、10 年以上続けている当事者・家族・支援者のサロン「えん」での活動です。そこには「障害者と専門職」という枠を超え、一人の人間として尊重し合う対等な関係がありました。この「化学反応」が起きる場を日常にしたいと考え、以下の理念を掲げました。

1. 「通いの場」の創出：介護保険二号被保険者世代が、自分らしく活動できる場を作る。
2. 集団の力の活用：一対一のリハビリでは得られない、仲間との交流による回復を促す。
3. 環境による自立：訓練室ではなく、実際の作業環境での工夫を通じて「できる」を増やす。



### 活動状況と日々の実践



現在「庵 -IORI-」では、半数以上が高次脳機能障害を持つ方々です。重度の記憶障害や失語症があっても、ST が介在し環境を整えることで、一人で完結できる作業が着実に増えています。「ST が B 型にいるのはもったいない」と言われることもあります。私は逆だと確信しています。生活という雑音のある集団の中でこそ、コミュニケーションの専門職としての真価が問われ、磨かれます。当事者同士の交流を媒介し、作業中の姿から真のニーズを評価する。この実践こそが、高次脳機能障害の方々の豊かな人生を支える鍵になると信じています。

## 『～高次脳機能障害 家族会の活動紹介～』

NPO 法人ノーサイド理事長 下田文枝

平成 13 年より全国で高次脳機能障害支援モデル事業が実施され、平成 18 年からは、高次脳機能障害の支援を都道府県が受け持つ事となりました。この様な流れの中で、群馬県でもようやく前橋赤十字病院が支援拠点に指定されました。その後令和 7 年 4 月に医療法人中沢会上毛病院に、続いて館林のつつじメンタルホスピタルが高次脳機能障害連携拠点医療機関に指定されました。この様な体制が群馬県での経緯です。

NPO 法人ノーサイドは、平成 15 年に設立された前身の「高次脳機能障害者家族会ぐんま」から、平成 19 年に高次脳機能障害者と家族と支援者の会「NPO 法人ノーサイド」を立ち上げました。設立当初群馬県ではこの高次脳機能障害の認知度は全国でも最下位に値するほど低く、当事者家族が想いを伝える事で一人でも多くの人に高次脳機能障害を『知って欲しい』との思いで啓発活動を始め進めてきました。同時にこの高次脳機能障害にはもう一つ大きな課題があります。家族の支援です。この様な後遺症を持った家族には、生活も一変する負担が生じます。介護・障害の支援の手続きや更新・・・等々 当事者が働き盛りの方だった場合には、苦しみに加え生活の維持も大きな問題となります。

家族会には只々ずがる思いで辿り着き参加する家族もいます。以前とは別人のように変わってしまった当事者、同じ障害を持つ方々と話していると、何故か『うちだけではない』と言い知れぬ安心感、安堵感を皆さん感じています。悩みや愚痴・困っている事など話せる居場所として、次に進むステップの場としてノーサイドを活用して欲しいと思っています。

現在ノーサイドの活動では、当事者家族が日常生活や社会生活での違和感、困りごとなどを知って欲しい！と今抱えている想いを『フォトボイス』（写真と言葉）で伝える取り組みをしています。当たり前を求めみんなで向き合って作成



にチャレンジしています。是非ご覧になってください。(https://www.npo-noside.com/)

主な活動場所は、前橋市総合福祉会館 1 階おもちゃの図書館ルームで毎月第 4 日曜日、午後 1 時 30 分から交流会を開いております。その他普及活動で年に数回講習会や勉強会も計画しています。

これから、関連機関との連携を深める活動、県内各地域に出向いての啓発普及活動、一人ひとりその方にあった正しい支援に繋がる支援を進め、ノーサイドの活動に理解して頂ける協力者を募り支えあえる活動に繋がりたいと思っています。



## 十勝から広がるピアサポートの可能性 — 国際ワークショップ開催報告

西條寧音 (NPO 法人みんなのポラリス)

2026年3月14日(土)・15日(日)の2日間、北海道帯広市の帯広畜産大学において、国際ワークショップ「共に語り、共に創る十勝からの対話—地域から広がるピアサポートのかたち—」が開催された。本ワークショップには、国内外の研究者、実践者、当事者が集い、ピアサポートをテーマに知見を共有するとともに、グローバルな視点から活発な議論が交わされた。

当日は、オランダおよびアメリカからのゲストによる基調講演が行われ、それぞれの国におけるピアサポートの実践や制度的背景について紹介があった。加えて、北海道地域における実践報告では、地域に根ざした取り組みや当事者主体の活動が具体的に示され、参加者の関心を集めていた。

特に印象的であったのは、アメリカから紹介された「フォトボイス」の実践である。本ワークショップでは、当事者自身によるフォトボイスの取り組みが行われ、会場内にはその作品が展示された。参加者は写真を通して当事者の視点や経験に触れることができ、さらに壇上でのディスカッションでは、作品に込められた思いや背景について理解を深める機会となった。



また、学生も参加した総合討論では、医療・福祉・地域といった多様な分野におけるピアサポートのあり方について議論が展開された。専門家と学生が立場を越えて対話を重ねる中で、地域における支え合いの可能性や今後の展望について、多角的な視点から意見が交わされていた。

本ワークショップは、ピアサポートの実践とその意義を改めて問い直すとともに、地域から広がる新たなつながりの可能性を示す場となった。国内外の知見と当事者の経験が交差することで、これからの地域社会のあり方を考える貴重な機会となった。



## 自主グループ活動紹介コーナー

### きらきら隊 (大阪北部脳疾患当事者会)

代表 鶴田みさお

丁寧なピアサポートとそれぞれの趣味、仕事、役割を前のめりで輝かせる社会に旋風を吹かす面白メンバーのグループです。

参加人数：25名 (グループLINE人数)

会 場：JR吹田駅前ビル

定 例 会：2か月に1回 活動内容：遠足、講習会、飲み会など

★新年会は、脳卒中当事者の店で約20名参加

★滋賀県高島市で森林浴 (歩かない森林セラピー) と琵琶湖湖畔散策ツアー。

たかしま森林セラピストグループと連携。

★4月の企画予定

淡路島大自然、新鮮お寿司堪能、英国風ガーデン散策淡路景観園芸学校ツアー (ガイド園芸療法士)

今後の課題は、声の発信、ピアサポートの社会、地域への浸透、制度改革、助成金、学生育成など。

片麻痺ゆるゆるキッチンスタジオもいつか!



## 日本高次脳機能障害友の会緊急集会に参加して

山田幸恵 (広報委員)

「高次脳機能障害者支援法」が令和8年4月1日から施行予定となりました。これを受け、法案成立に長年尽力した日本高次脳機能障害友の会は緊急集会を令和8年1月24日に開催しました。法案成立から緊急集会まで1か月余りという短い期間にも関わらず、会場には200人近い関係者、高次脳機能障害当事者、ご家族、支援者が集まりました。集会は法案成立までの報告会と、シンポジウム「高次脳機能障害者がある人のこれから～高次脳機能障害者支援法で何が変わるのか～」の2部で構成されていました。本案は「施行後三年を目途に施行状況について検討する」とあります。今から行動する必要があると、緊急集会開催の理由が述べられていました。



## 編集後記

本号では、第15回東京大会のご案内をはじめ、各地での取り組みをご紹介しました。編集をしながら、「Nothing about us without us (私たちのことを、私たち抜きに決めないで)」という言葉が、障害者権利条約の策定過程でも大切にされてきたことを思い起こし、その理念がまさに本号で紹介した実践の中に息づいていると感じました。当事者・家族・支援者がともに語り、関わり合う本学会のあり方の大切さを改めて実感しています。東京大会でも、こうした出会いや対話がさらに広がっていくことを楽しみにしています。

- 鈴木 倫 -